

養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響

—文献レビューによる考察—

妻鹿 智晃

帝京短期大学 生活科学科

【抄録】

本研究の目的は、養護教諭の複数配置に関連する研究論文を包括的にレビューし、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について検討し、今後の研究課題を明らかにする一助とすることである。分析の結果、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について、【相談的対応の充実】、【救急処置の充実】、【健康診断の充実】、【保健指導の充実】、【時間的・精神的余裕を持った児童生徒対応】、【迅速な児童生徒対応】、【多面的・客観的な視点による幅広い児童生徒対応】、【児童生徒のニーズに応じた個々の特性を生かした対応】、【保健室不在状況の回避】、【休暇取得に対する制約感の軽減】、【職務分担による負担軽減】、【同時進行による職務効率の向上】、【相互の相談連携による資質能力の向上】、【自己研鑽機会の増加】、【相談等による精神的安定】が主な利点として示され、【職務分担の偏り】、【責任の偏り・所在不明確】、【情報交換の負担感・困難感】、【自己研鑽機会の減少】、【人間関係による精神的負担】が主な問題点として示され、養護教諭の複数配置に関する今後の各種研究課題が示唆された。

【キーワード】 養護教諭, 複数配置, 実践, 文献レビュー

I. はじめに

Society5.0時代の到来による劇的な社会的変化が予想される昨今、子どもたちが次代を切り拓くために求められる資質・能力を身につけることができる持続可能な学校教育を実現するために、学校における働き方改革とチームとしての学校の機能強化が必要とされている¹⁾。「養護をつかさどる」養護教諭は、「学校に置かれる教員として、従来から、児童生徒等の心身の健康について中心的な役割を担ってきた」²⁾と評され、学校教育の一翼を担っているが、その職務は時代のニーズに応じて多様化しており、1校に一人という少人数配置であるが故に多忙を極める養護教諭の実態が報告されている^{3), 4)}。

これらの改善策のひとつとして、養護教諭の複数配置が考えられる。養護教諭の複数配置については、平成5年度施行の第6次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画及び第5次公立高等学校学級編成及び教職員配置改善計画において国の基準が初めて明示され、その後、平成13年度施行の第7次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画及び第6次公立高等学校教職員定数

改善計画にて、小学校は児童数851人以上、中学校・高等学校は生徒数801人以上、特別支援学校は児童生徒数61人以上という基準に基づき養護教諭の複数配置の拡充が行われ、現在に至る。これまで平成9年保健体育審議会答申⁵⁾や平成20年中央教育審議会答申⁴⁾において、養護教諭の複数配置促進の必要性について述べられており、近年では、平成27年中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」²⁾において、「引き続き、児童生徒等の心身の健康に関して課題の大きな学校については、養護教諭の複数配置を進めていく必要がある。さらに、養護教諭の必要性が高まっていることから、今後、国において、複数配置の基準の引下げについても検討していくべきである」と言及し、今後の方策として「国は、養護教諭が専門性と保健室の機能を最大限に生かすことができるよう、大規模校を中心に、養護教諭の複数配置を進める」と打ち出しており、養護教諭の複数配置促進が期待される。

このような養護教諭の複数配置の基準引下げや加配等が、多忙を極める現状改善の一手となることが考えられるが、「保健室利用状況に関す

る調査報告書（平成 28 年度調査結果）」⁶⁾によると、養護教諭が複数配置されている学校の割合は、小学校 10.4%，中学校 12.3%，高等学校 32.6%であり、依然大半は一人配置である。今後、さらに養護教諭の複数配置を促進させるためには、養護教諭の複数配置の実態を調査し、有益性を明らかにするとともに、課題を明らかにし、解決策を検討し改善していくことが重要である。そのためにも、まずは近年の研究成果を体系的に整理し、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響及び今後の研究課題について明らかにする必要があると考えた。

本研究は、養護教諭の複数配置に関連する研究論文を包括的にレビューし、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について検討し、今後の研究課題を明らかにする一助とすることを目的とする。

II. 方法

1. 文献検索方法

文献検索について、文献の検索データベースは国立情報科学研究所 NII 学術情報ナビゲーター (CiNii)、医学中央雑誌、国立国会図書館検索・申込オンラインサービス (NDLONLINE) を用いた。検索に際し、検索式は『(複数配置 OR 配置 OR 加配) AND 養護教諭』と設定した。発行年については指定せずに検索を行った。検索実施日は 2020 年 4 月 23 日とした。

2. 対象文献の選定

検索式に基づき抽出された文献のうち、重複文献を除外し、その後、以下の除外条件に沿ってレビュー対象とする文献の絞り込みを行った。

- ① 解説・特集・学会抄録・会議録・書籍として書かれたもの
- ② 1999 年以前に掲載されたもの
- ③ 文献表題と抄録を閲覧し、養護教諭の複数配置に関する研究内容を扱っていないと判断されたもの
- ④ 文献を全文精読し、本研究のリサーチクエスチョンに合致しないと判断されたもの

3. 分析方法

分析対象として採択された文献について、「表題・著者・発行年・掲載誌・巻・号・頁・目的・

対象・方法・結果及び考察」等の項目に沿って整理した。さらに、大木⁷⁾による分析方法を参照し、①各文献の主要な結果及び考察を、キーワードを用いてコード化し、②すべての文献を同一または類似のコードでまとめて共通のカテゴリを見つけて同定し、③カテゴリ間の異同を考慮して論理的に矛盾しないように並び替える、という文献統合手順で帰納的に分類整理・検討し、「養護教諭の複数配置が養護教諭の実践にどのような影響を与えるか」という視点で質的に分析を行った。

4. 倫理的配慮

本研究に関して利益相反関係にある個人や組織は存在しない。

III. 結果

1. 文献の抽出結果

文献検索の結果、国立情報科学研究所 NII 学術情報ナビゲーター (CiNii) より 77 件、医学中央雑誌より 60 件、国立国会図書館検索・申込オンラインサービス (NDLONLINE) より 43 件の計 180 件が検索された。180 件のうち、重複文献 59 件を除外した。次に、解説・特集・学会抄録・会議録・書籍として書かれた文献 18 件を除外し、さらに、1999 年以前に掲載された文献 11 件

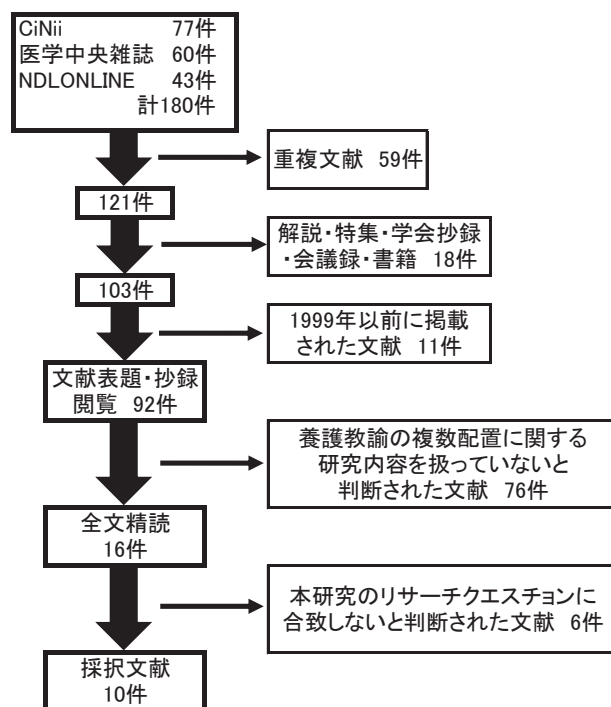


Figure 1. 対象文献選定プロセスのフローチャート

Table 1. 対象文献一覧

No.	表 題	著 者	発行年	掲載誌	巻 号	頁	対 象	方 法
①	養護教諭の複数配置に関する調査研究	美馬 信	2000	大阪女子短期大学紀要	25	129-136	養護教諭＜複数配置未経験者含む＞	質問紙調査
②	養護教諭の複数配置に関する意識調査—北海道内大規模公立高等学校養護教諭を対象とした—	津村 直子, 岩淵 加代子	2000	北海道教育大学紀要 教育科学編	51	113-121	養護教諭＜複数配置＞	質問紙調査
③	時代のニーズに応じた養護教諭の適正配置(1)—先行文献から—	竹田 由美子, 石原 昌江, 下村 淳子, 郷木 義子, 辻 立世, 外山 恵子, 美馬 信, 小林 育枝, 近藤 文子	2001	日本養護教諭教育学会誌	4	38-49	文献	文献レビュー
④	養護教諭の複数配置校における職務内容に関する研究—北海道内大規模公立高等学校養護教諭を対象とした—	津村 直子, 岩淵 加代子	2001	北海道教育大学紀要 教育科学編	52	209-217	養護教諭＜複数配置＞	質問紙調査
⑤	養護教諭複数配置やスクールカウンセラー導入が養護教諭の職務に与える影響(1)—養護教諭の職務不全感を中心に—	有村 信子	2002	鹿児島純心女子短期大学研究紀要	32	1-13	養護教諭＜複数配置未経験者含む＞	質問紙調査
⑥	複数配置校における養護教諭の活動実態—一日の活動及び保健室来室者への対応から捉えた利点—	後藤 ひとみ, 小川 佳子, 内山 奈美子	2005	愛知教育大学研究報告 教育科学編	54	47-55	養護教諭＜複数配置＞	観察調査並びに面接調査
⑦	養護教諭複数配置と男性養護教諭—質問紙調査からの検討: 第2報—	大野 泰子, 永石 喜代子, 米田 綾夏, 寺田 圭吾, 小林 壽子	2008	錦鹿短期大学紀要	28	95-107	養護教諭＜複数配置未経験者含む＞	質問紙調査
⑧	養護教諭の複数配置—現職養護教諭が考える理想的な複数配置の検討—	飯嶋 美里, 斉藤 ふくみ	2014	茨城大学教育学部紀要 教育総合		331-343	養護教諭＜複数配置＞	面接調査並びに質問紙調査
⑨	養護教諭複数配置の利点と問題点—経験者の語りから—	中森 あゆみ	2015	日本養護教諭教育学会誌	19	35-41	養護教諭＜複数配置または複数配置経験者＞	面接調査
⑩	健康相談における児童生徒の充実感に関する調査研究—養護教諭の配置数に着目して—	小笠原 葵, 斉藤 ふくみ	2018	茨城大学教育学部紀要 教育科学	67	481-498	児童生徒＜小学生・中学生＞	質問紙調査

件を除外した。次に、文献表題と抄録を閲覧し、養護教諭の複数配置に関する研究内容を扱っていないと判断された文献 76 件を除外した。その後、絞り込まれた文献を全文精読し、本研究のリーサークエスチョンに合致しないと判断された文献 6 件を除外し、最終的に 10 件の文献^{8)・17)}を分析対象として採択した。対象文献選定プロセスのフローチャートを Figure 1. に示す。また、Table 1. に対象文献 10 件の一覧を示す。

2. 対象文献の概要

発行年は、2000 年 2 件、2001 年 2 件、2002 年 1 件、2005 年 1 件、2008 年 1 件、2014 年 1 件、2015 年 1 件、2018 年 1 件であった。研究方法は質問紙調査 6 件、面接調査 1 件、面接調査並びに質問紙調査 1 件、観察調査並びに面接調査 1 件、文献レビュー 1 件であった。対象者は養護教諭複数配置経験のある養護教諭のみを対象とした研究 5 件、養護教諭複数配置未経験者を含む養護教諭を対象とした研究 3 件、児童生徒を対象とした研究 1 件、文献を対象とした研究 1 件であった。

3. 養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響に関する分析結果

対象文献 10 件の結果及び考察から帰納的に分類整理・検討し、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について分析を行った。以下、該当する内容が記載された文献について、Table 1. の文献 No. を () 内に示し、カテゴリを【 】、コードを斜体で示し説明する。

学校保健活動全般への影響については、養護教諭の複数配置によって、各種学校保健活動の充実が期待できることが示されている。特に、複数人来室時も相談的対応に時間をかけることができる (⑥) 等、【相談的対応の充実】(②, ⑤, ⑥, ⑩) や、最も複数配置でよかったと思う職務内容は救急処置 (④) 等、【救急処置の充実】(③, ④, ⑩)、健康診断での負担軽減ができる (③) 等、【健康診断の充実】(③, ④, ⑧)、タイムリーな保健指導が実施できる (⑥) 等、【保健指導の充実】(③, ④, ⑥) について、複数の文献において効果が示されている。

児童生徒への対応については、一人ひとりゆとりを持って対応できる (①, ⑤)、余裕を持って生徒に対応できる (②)、同時来室で複数の児

童生徒がいても、同じ状況の単数校より待たせず、ゆっくり対応できる (③)、複数来室時にも混乱することなく対応できる (⑥)、ゆっくり話ができる (⑩) 等、養護教諭の複数配置によって、【時間的・精神的余裕を持った児童生徒対応】(①, ②, ③, ⑤, ⑥, ⑩) ができることが示されている。時間的・精神的余裕だけでなく、緊急時に素早い対応ができる (①)、保健室来訪者を長時間待たせずにすむ (②) 等、【迅速な児童生徒対応】(①, ②, ⑥, ⑩) ができることも示されている。

また、二人の専門的な目で生徒を異なる角度から捉えることにより、より正確な判断ときめ細かい指導ができる (④)、児童生徒の観察・処理が客観的に行える (⑤)、二通りの見方や考え方ができ、見方が偏らず、処置や指導の幅が広がる (⑥)、複数の養護教諭がそれぞれ異なる視点から多面的に観察・対応することで、子どもの課題を見逃さず早期発見することにもつながる (⑧) 等、【多面的・客観的な視点による幅広い児童生徒対応】(④, ⑤, ⑥, ⑧) ができることが示されている。その他、養護教諭各々の特性を生かした対応により、児童生徒がどちらかの養護教諭を選んで対応するケース等での質的向上が図れる (⑥)、複数配置による多面的な視点からの支援により、各養護教諭の特性や個性を生かした養護活動の展開ができ、子どもの求めるタイプへの対応が可能 (⑧)、子どもが自分との相性や話したい内容によって養護教諭を選択できる (⑨)、子どもが自分と合った先生に相談できる (⑩) 等、【児童生徒のニーズに応じた個々の特性を生かした対応】(⑥, ⑧, ⑨, ⑩) ができることが示されている。

保健室運営の視点で概観すると、保健室不在が少なく精神的に楽になる (③)、生徒を病院等へ移送する際も保健室を空けずに対応できる (⑥)、食事時間を確保しつつ保健室での常駐を保てる (⑥)、養護教諭が体調を崩した場合や学校行事に参加する際に保健室を不在にせずに済む (⑧)、保健室に養護教諭が不在となる事態の回避 (⑨) 等、養護教諭の複数配置によって、養護教諭の【保健室不在状況の回避】(③, ⑥, ⑧, ⑨) が図れることが示されている。運営上の体制に関しても、年休・出張等が安心してとれる (②)、休みが取りやすく仕事を家庭に持ち帰ることも少ない (③) といった、【休暇取得に

対する制約感の軽減】(②, ③) が期待できることが示されている。

職務分担等連携体制については、**分担等**で**職務負担が軽減し体力的・精神的に楽になる** (③)、**分担したことで互いの負担を減らすことができる** (⑧)、**仕事の分担による負担軽減** (⑨) 等、**【職務分担による負担軽減】** (②, ③, ⑥, ⑧, ⑨) が利点として示されている。また、**救急処置は分担で手早く処置できる** (③)、**救急処置時に生徒への対応を中断することなく処置の準備を行うといった1つの執務内での役割分担ができる** (⑥) 面と、**保健室来室者への対応等を継続しながら会議への出席ができる**といった2つの異なる仕事を同時進行で対応できる (⑥) という面での分担があり、両面において、**【同時進行による職務効率の向上】** (③, ⑥) が期待できることが示されている。

一方で、**同じ資格でない場合の仕事量の違い** (③) や、**職務の分担が平等でない** (④)、**経験年数や性別等の違いから分担に偏りが出してしまう** (⑧) といった経験年数や資格等による**【職務分担の偏り】** (②, ③, ④, ⑧)、**責任の所在が不明確になる** (②, ③)、**年齢差があると、年上の先生に責任が偏ってしまう** (⑧) といった**【責任の偏り・所在不明確】** (②, ③, ⑧) な状況が生じることが問題点として示されている。また、**情報交換を頻繁に行わなければならない** (②)、**情報交換がうまくいかない** (④)、**情報交換をして共通理解を図ることは忙しい業務の中では難しい** (⑧) といった**【情報交換の負担感・困難感】** (②, ③, ④, ⑧) も問題点として示されている。

養護教諭の研鑽については、**相互に刺激しあい養護教諭自身が向上する** (②)、**養護教諭同士相談・連絡し合い資質を高め合える** (⑤)、**互いの対応を観察し合うことで能力の相互向上につながる** (⑧)、**今までの経験が違うもの同士なので新しい知識を得ることもできる** (⑧)、**これまで培ってきた経験をパートナーの養護教諭に伝えていくことで次の世代を育てていくことも複数配置では行いやすい** (⑧)、**経験年数等を問わない相互の学びがある** (⑨) 等、**【相互の相談連携による資質能力の向上】** (②, ⑤, ⑧, ⑨) が期待できることが示されている。

また、**研鑽の機会については、自己研修の機会が増やせる** (①)、**研修が受けやすく養護教諭**

の力量向上につながる (③) という**【自己研鑽機会の増加】** (①, ③) が利点として示されている一方で、**研修会等に二人同時に出席しにくい** (②)、**研修の機会が減少する** (③) といった**【自己研鑽機会の減少】** (②, ③) が問題として示されている研究結果もあり、意見が分かれている。

養護教諭のメンタルヘルスについては、**相談できる仲間ができ心強い** (②)、**一人職の周囲に分かってもらえない感覚を分かち合える心強さ** (⑨) 等、養護教諭同士の**【相談等による精神的安定】** (②, ⑦, ⑨) が期待できることが示されている。しかし一方で、**人間関係が難しく精神的に負担となる** (②)、**養護教諭二人の人間関係悪化による精神的負担** (③)、**考え方の相違からくる感情的な対立と人間関係の問題** (⑦)、**人間関係の不和によるストレスが、最も精神的な負担** (⑧)、**対抗意識をもってしまうことによる精神的な辛さ** (⑨) 等、**【人間関係による精神的負担】** (②, ③, ⑦, ⑧, ⑨) が生じることが問題点として示されている。

IV. 考察

本研究の目的は、養護教諭の複数配置に関連する研究論文を包括的にレビューし、養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について検討し、今後の研究課題を明らかにする一助とすることである。以下に、分析結果について考察を述べる。

1. 調査対象からみる研究動向

10 件の対象文献の対象者について、養護教諭複数配置経験のある養護教諭のみを対象とした研究 5 件、養護教諭複数配置未経験者を含む養護教諭を対象とした研究 3 件、児童生徒を対象とした研究 1 件、文献を対象とした研究 1 件であった。児童生徒を対象とした研究が 1 件あることは特筆すべき点である。養護教諭の実践について養護教諭を対象に研究し、発信することは無論重要であるが、「養護をつかさどる」養護教諭の実践は児童生徒に対して直接的または間接的に行われるものである。その児童生徒の声から養護教諭の複数配置の利点や問題点が客観的に明らかにされていくことは有益なものである。今後、養護教諭を対象とした研究はもちろんのこと、児童生徒や管理職、他の教職員等、

養護教諭の実践に関わる様々な立場の者を対象にすることで、養護教諭の複数配置について多面的に捉え評価していく必要がある。

2. 学校保健活動全般に関する影響

学校保健活動への影響に関して、養護教諭の複数配置によって【相談的対応の充実】、【救急処置の充実】、【健康診断の充実】、【保健指導の充実】等各種学校保健活動の充実が期待できることが示されていた。「保健室利用状況に関する調査報告書（平成28年度調査結果）」⁶⁾においても、養護教諭の複数配置の効果として、「救急処置に迅速に対応」、「検診結果の事後措置徹底」、「個別保健指導の時間確保が容易になった」等の項目が高い割合を示しており、本研究結果と概ね一致しており、養護教諭の複数配置が特に効果的であることが示唆される。また、養護教諭は救急処置活動や疾病予防などの保健管理、健康相談・健康相談活動について周囲のニーズが高いと認識している傾向があり¹⁸⁾、複数配置の養護教諭はニーズに応えるためにこれらの学校保健活動について特に積極的に養護教諭間で連携し、充実を図っていることが考えられる。今後、各学校保健活動について効果的な職務分担や組織体制等について具体的に明らかにすることで、さらなる学校保健活動の充実が期待できる。

3. 児童生徒対応に関する影響

児童生徒対応に関して、養護教諭の複数配置によって【時間的・精神的余裕を持った児童生徒対応】、【迅速な児童生徒対応】、【多面的・客観的な視点による幅広い児童生徒対応】、【児童生徒のニーズに応じた個々の特性を生かした対応】ができることが示されていた。平成20年中央教育審議会答申⁴⁾において、保健室へ来室する子どもの心身の健康課題が多様化し、来室者が多い上に、一人当たりの対応時間も増加しており、一人の養護教諭では、より良い対応を図ることが困難な状況にあり、養護教諭の複数配置の促進などを図る必要があることが述べられている。「保健室利用状況に関する調査報告書（平成28年度調査結果）」⁶⁾によると、大規模校（500人以上）における1校当たりの1日平均保健室利用者数は、養護教諭一人配置校で小学校36.9人、中学校25.1人、高等学校20.0人である

のに対し、複数配置校では小学校51.5人、中学校38.5人、高等学校22.8人と全学校種で複数配置校の方が利用者数が多かったことが報告されており、養護教諭の複数配置がより多くの子どもたちへの対応を可能としていることがわかる。保健室来室者が増加することにより、【時間的・精神的余裕を持った児童生徒対応】や【迅速な児童生徒対応】は困難になるようにも考えられるが、複数配置は養護教諭が二人、三人と増えることで、各学校や保健室の実態を踏まえた養護教諭同士の連携によって、【多面的・客観的な視点による幅広い児童生徒対応】や【児童生徒のニーズに応じた個々の特性を生かした対応】が可能となる。その結果、単純に労力が加算的に増すのではなく相乗効果が生まれ、2倍、3倍の力を発揮することで、利用者数が多い状況でも時間的・精神的に余裕を持って、迅速に対応することができていると推察される。今後、保健室来室者に対する養護教諭の対応について養護教諭同士の連携やマネジメントに焦点を当てて調査することで、人員増加による単純な量的変化だけでなく、養護教諭の対応の質的な変化についても詳細を明らかにする必要がある。

4. 保健室運営に関する影響

保健室運営に関して、養護教諭の【保健室不在状況の回避】が図れることが示されていた。例えば、養護教諭不在時の学校救急体制整備の必要性¹⁹⁾や養護教諭の保健学習実施に伴う養護教諭不在時の保健室管理等校内体制の確立の必要性²⁰⁾など、学校保健活動の中核を担う養護教諭⁴⁾の学校及び保健室不在時の対応等体制整備は課題のひとつであり、可能な限り不在状況を回避できることが望ましい。しかし、医療機関受診時の引率や学校行事への引率等、養護教諭が一人配置の場合は保健室を不在にせざるを得ない状況は様々な想定される。養護教諭の複数配置によって各種職務を遂行しながらも保健室を不在にすることなく保健室来室者への対応や緊急時の救急対応ができることは養護教諭の複数配置の非常に大きな利点であるといえる。

また、【休暇取得に対する制約感の軽減】については、教員の勤務実態を鑑みて捉える必要がある。「公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究報告書（平成29年度文部科学省委託研究）」²¹⁾によると、教員の1週間当たりの総勤務

時間について、小学校教諭の33.4%、中学校教諭の57.7%が週60時間以上の勤務となっている。これは、月80時間以上の時間外労働を意味し、過労死を引き起こす脳・心臓疾患発症との関連性が強いとされる、業務の過重性評価の基準値に該当しており²²⁾、労働基準上危険な状況に置かれている実態であることがわかる。養護教諭についても、1週間当たりの学内総勤務時間が平成18年度調査結果²³⁾と比較して増加している。同調査²¹⁾において、勤務時間が一定を超えて長くなるほどストレス反応が高値となり、メンタルヘルスの状態が悪化する傾向にあることが明らかになっており、養護教諭も他の教職員同様、過酷な労働環境下に身を置く状況であることは想像に難しくない。武田ら²⁴⁾は、養護教諭のメンタルヘルスについて、ワークライフバランスの支援により仕事と家事・育児の多重役割負担を改善することが重要であり、代替要員がいない環境が職場でのワークライフバランス支援をすすめる上でも現実的な障害となることから、養護教諭の複数配置による環境整備が職場における抑うつ関連ストレスの軽減対策として基本的に重要であると述べている。このことから、養護教諭の複数配置が前述の【保健室不在状況の回避】をしつつ、休暇や出張をとりやすくし、持ち帰りの仕事を軽減させるなど、養護教諭の働き方や保健室運営に影響を与え、心身の負担軽減に寄与していると考えられる。

5. 連携体制に関する影響

職務分担等連携体制に関して、養護教諭の複数配置によって【職務分担による負担軽減】や【同時進行による職務効率の向上】が期待できることが示されていた。「公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究報告書（平成29年度文部科学省委託研究）」²¹⁾では、小学校中学校共に、教員一人当たりの児童生徒数が多いほど総勤務時間が長く、教員・職員含めた人員体制の増加が、勤務時間の減少につながることを明らかにしている。これは、人員増加という量的な変化により、養護教諭についても負担の軽減が期待できる。また、小西ら²⁵⁾は、看護職者を対象とした調査にて、多重課題業務（いくつもの業務を同時並行に行っている状態）でかつ多忙である時にはインシデント・アクシデントが発生しやすいことを明らかにしている。保健管理や保健教

育等、様々な学校保健活動を実践する養護教諭も複数の職務を同時進行する場面が多々存在する。鈴木ら²⁶⁾の養護教諭の職務負担感と職務意識に関する研究では、養護教諭の役割葛藤状況として、「職務が慢性的に多忙化している」という職務の多忙化と、「達成基準が不明瞭で仕事が一際限なく広がっている」という職務の無限定性の面、「同時に複数の仕事をしなければならない」という多忙化をもたらす職務特性等について養護教諭がネガティブに評価していることを明らかにしている。養護教諭の複数配置により複数人で職務を分担し、相互に確認しながら遂行することは、一人で職務を複数同時に担う状況を緩和し、ヒューマンエラーを防止し、職務効率の向上や負担軽減につながっていると考えられる。

一方で、経験年数や資格等による【職務分担の偏り】や【責任の偏り・所在不明確】、【情報交換の負担感・困難感】が問題点として示されていた。養護教諭の複数配置時の職務分担や組織体制等の整備は課題のひとつであり、職務分担や責任の偏りを生じさせない体制の構築を進めるために、前述のとおり効果的な職務分担や組織体制等について、今後さらに具体的に研究を進め明らかにする必要がある。

6. 自己研鑽に関する影響

養護教諭の研鑽に関して、養護教諭の複数配置によって【相互の相談連携による資質能力の向上】が期待できることが示されていた。井上²⁷⁾は、学校現場の多忙さや年齢構成の歪さによる個々の教員同士の繋がりとしての同僚関係の難しさを背景に、ベテランと若手の間に世代間の壁を形成する危険性が生まれており、多くの教師が自己の成長に不安と不満を感じ、協働による職能成長を望んでいることを明らかにしている。さらに、小原²⁸⁾は、教師の同僚性について、教師としての成長には同僚関係、特に助言・援助を軸とした同僚関係を作り上げることが大きな影響を与えており、若手教師にとっては中堅教師との、中堅教師にとっては若手教師との同僚関係の中で双方が共に成長していくものであると述べている。対象文献において、今までの経験が違うもの同士なので新しい知識を得ることもできる(⑧)、これまで培ってきた経験をパートナーの養護教諭に伝えていくことで次の

世代を育てていくことも複数配置では行いやすい(⑧)、経験年数等を問わない相互の学びがある(⑨)とあるように、これは複数配置の養護教諭にとっても同様のことが言えるのではないだろうか。平川²⁹⁾は、養護教諭の資質能力向上に関する学習状況について、養護教諭は自分の見立てについて誰かに相談したり協議したりする、対話を通して確かめたり異なる意見を受け入れたりする行動など、他者に相談する行動を頻繁に行っていることを明らかにしている。この相談連携先については、養護教諭が一人配置の場合は校内の他の教職員や他校の養護教諭等が考えられるが、養護教諭が複数配置の場合であれば、相互に対応・観察しつつ、円滑に状況把握を行うことができ、より専門的かつタイムリーに相談連携することで、養護教諭としての資質能力の向上を図ることができるのではないだろうか。丹³⁰⁾は、養護教諭が主に一人配置であるために同僚や先輩から経験的に学ぶことが少ないことを問題点として指摘しており、このような一人配置と複数配置の差は養護教諭の資質能力向上において大きなものであると考えられる。校内に同職者がいることが、資質能力の向上にどのような影響を与えているのか、今後、一人配置校の養護教諭や一般教諭との比較等を通して具体的に明らかにする必要がある。

また、【自己研鑽機会の増加】が利点として示された一方で、【自己研鑽機会の減少】が問題点として示されており、意見が分かれていた。留目³¹⁾は校長を対象とした研究において、校長が、養護教諭にとって重要な学びの機会である校外研修等への参加の推奨・支援をするとともに、自ら教員評価面談を中心とした養護活動の把握、指導・助言、評価に取り組んでいるが、養護教諭を校外研修に安心して送り出せる学校保健体制の実質的な整備が困難な現実との狭間で養護教諭の力量の獲得・向上を十分に支援できないというジレンマを有している実情を示唆している。【自己研鑽機会の増加】と【自己研鑽機会の減少】という差は管理職をはじめとする教職員の養護教諭の職務等に対する理解や、校内体制が大きく影響していると考えられる。武田ら³²⁾は、学校組織において一般教諭には代替不能な、子どもの養護に関わる専門職である養護教諭の固有の価値の積極的評価や、日々の実践検証によって自尊心を高めることが、養護教諭のメン

タルヘルス上重要であり、研修等の機会を通じて実践検証能力や自尊心の向上を図っていくことが有効であることを明らかにしている。自己研鑽が専門職としての資質能力の向上、メンタルヘルス上重要であることは明らかであり、今後、養護教諭複数配置校の管理職をはじめとする教職員の養護教諭の職務等に対する理解や校内体制の実態等と養護教諭の自己研鑽との関連について焦点を当てた研究を進める必要がある。

7. メンタルヘルスに関する影響

養護教諭のメンタルヘルスに関して、養護教諭の複数配置によって、養護教諭同士の【相談等による精神的安定】が期待できることが示されていた。武田ら²⁴⁾は、「児童生徒・同僚・保護者・上司から、過剰あるいは矛盾した期待や要求をされることが多い」、「自分の能力以上の仕事や苦手な役割を求められることが多い」、「児童生徒あるいは教師や学校のいずれの立場を優先させるべきか迷うことが多い」といった役割葛藤への対処方法のひとつとして、他校養護教諭との相談支援体制の構築や地区ごとに現職養護教諭リーダーを育成して問題解決や支援を図るといった対策を挙げている。これを校外だけでなく、学校の実態を理解しあった校内の養護教諭同士で相談できることは、問題解決において、そして精神安定上大きな利点であると考えられる。

一方で、【人間関係による精神的負担】が生じることが問題点として示されていた。川瀬³³⁾は、「教師間で教育観・価値観の違いを感じる」、「他の教師の児童・生徒に対する態度への疑問」などの「教員との関係」がバーンアウトの原因のひとつであり、これらの経験が多い教師ほどバーンアウトの傾向が高いことを明らかにしている。また、赤岡ら³⁴⁾は、同僚に対するストレスは児童生徒への指導方針や教育観の相違に起因するものであり、職務上かわりをもつ多様な対人関係と複雑に絡み合っていることを明らかにしている。養護教諭の複数配置の場合、保健室という空間で共に過ごし、同職として職務を協働しながら進めるため、これらの影響がさらに大きいことが推察される。

以上のように、養護教諭の複数配置は養護教諭同士の関係性に応じて精神的な安定にも、精神的な負担にもなり得るものであり、メンタル

ヘルスに大きな影響を与えていることがわかる。草海³⁵⁾は、教師のメンタルヘルスと対人関係について、「同僚はストレス要因にもなり得るし、サポート要因にもなり得る」と述べている。これまで養護教諭のメンタルヘルスを主題とする研究において、養護教諭の複数配置に特化されたものは見当たらない。養護教諭の複数配置と養護教諭のメンタルヘルスとの関連については、今後の養護教諭の複数配置促進にあたって重要な研究課題であると考えられる。

V. まとめ

養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について検討し、今後の研究課題を明らかにする一助とすること目的に、養護教諭の複数配置に関連する研究論文10件を包括的にレビューし、分析した結果、以下の知見が得られた。

1 養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について、【相談的対応の充実】、【救急処置の充実】、【健康診断の充実】、【保健指導の充実】、【時間的・精神的余裕を持った児童生徒対応】、【迅速な児童生徒対応】、【多面的・客観的な視点による幅広い児童生徒対応】、【児童生徒のニーズに応じた個々の特性を生かした対応】、【保健室不在状況の回避】、【休暇取得に対する制約感の軽減】、【職務分担による負担軽減】、【同時進行による職務効率の向上】、【相互の相談連携による資質能力の向上】、【自己研鑽機会の増加】、【相談等による精神的安定】が主な利点として示された。

2 養護教諭の複数配置が養護教諭の実践に与える影響について、【職務分担の偏り】、【責任の偏り・所在不明確】、【情報交換の負担感・困難感】、【自己研鑽機会の減少】、【人間関係による精神的負担】が主な問題点として示された。

3 今後、研究対象を養護教諭に限定することなく、児童生徒や管理職、他の教職員等を対象とした研究により養護教諭の複数配置についてより多面的に捉え評価する必要がある。また、養護教諭複数配置校の養護教諭を対象とした、効果的な職務分担や組織体制、保健室来室者に対する養護教諭同士の連携やマネジメント等に関する追究、一人配置の養護教諭や一般教諭との比較による、養護教諭の資質能力向上に関する

追究、養護教諭複数配置校の管理職をはじめとする教職員の養護教諭の職務等に対する理解及び校内体制の実態等と養護教諭の自己研鑽との関連、養護教諭の複数配置と養護教諭のメンタルヘルスとの関連の追究等が今後の研究課題のひとつとなることが示唆された。

【文献】

- 1) 中央教育審議会（2019）新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）
Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985.htm（2020年8月28日）
- 2) 中央教育審議会（2015）チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）
Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm（2020年8月28日）
- 3) 山田小夜子・橋本廣子（2009）養護教諭の職務の現状に関する研究 岐阜医療科学大学紀要（3），77-81
- 4) 中央教育審議会（2008）子どもの心身の健康を守り、安心・安全を確保するために学校全体としての取り組みを進めるための方策について（答申）
Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216829_1424.html（2020年8月28日）
- 5) 保健体育審議会（1997）生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について（答申）
Retrieved from https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314691.htm（2020年8月28日）
- 6) 公益財団法人日本学校保健会（2018）保健室利用状況に関する調査報告書（平成28年度調査結果）
- 7) 大木秀一（2016）看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん 医歯薬出版株式会社 pp. 80-85
- 8) 美馬信（2000）養護教諭の複数配置に関する調査研究 大阪女子短期大学紀要，（25），

- 9) 津村直子・岩淵加代子 (2000) 養護教諭の複数配置に関する意識調査 — 北海道内大規模公立高等学校養護教諭を対象とした — 北海道教育大学紀要教育科学編, 51 (1), 113-121
- 10) 竹田由美子・石原昌江・下村淳子・郷木義子・辻立世・外山恵子・美馬信・小林育枝・近藤文子 (2001) 時代のニーズに応じた養護教諭の適正配置 (1) — 先行文献から — 日本養護教諭教育学会誌, 4 (1), 38-49
- 11) 津村直子・岩淵加代子 (2011) 養護教諭の複数配置校における職務内容に関する研究 — 北海道内大規模公立高等学校養護教諭を対象とした — 北海道教育大学紀要教育科学編, 52 (1), 209-217
- 12) 有村信子 (2002) 養護教諭複数配置やスクールカウンセラー導入が養護教諭の執務に与える影響 (I) — 養護教諭の執務不全感を中心に — 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, (32), 1-13
- 13) 後藤ひとみ・小川佳子・内山奈美子 (2005) 複数配置校における養護教諭の活動実態 — 一日の活動及び保健室来室者への対応から捉えた利点 — 愛知教育大学研究報告教育科学, 54, 47-55
- 14) 大野泰子・永石喜代子・米田綾夏・寺田圭吾・小林壽子 (2008) 養護教諭の複数配置と男性養護教諭 — 質問紙調査からの検討: 第2報 — 鈴鹿短期大学紀要, 28, 95-107
- 15) 飯嶋美里・斉藤ふくみ (2014) 養護教諭の複数配置 — 現職養護教諭が考える理想的な複数配置の検討 — 茨城大学教育学部紀要教育総合増刊号, 331-343
- 16) 中森あゆみ (2015) 養護教諭複数配置の利点と問題点 — 経験者の語りから — 日本養護教諭教育学会誌, 19 (1), 35-41
- 17) 小笠原葵・斉藤ふくみ (2018) 健康相談における児童生徒の充実感に関する調査研究 — 養護教諭の配置数に着目して — 茨城大学教育学部紀要教育科学, (67), 481-498
- 18) 塚原加寿子・笠巻純一・松井賢二・波多幸江 (2017) 養護教諭が認識する周囲からのニーズに関する研究 — A市における小学校・中学校に着目して — 日本養護教諭教育学会誌, 21 (1), 45-56
- 19) 新谷敦子・廣原紀恵 (2015) 学校管理下における教職員の救急処置に関する研究 — 養護教諭不在時の学校救急体制と教職員の救急処置の知識に焦点をあてて — 茨城大学教育学部紀要教育科学, (64), 205-220
- 20) 後藤和己・西村梓 (2016) 養護教諭がかかわる保健学習の現状と課題 熊本大学教育学部紀要, (65), 215-222
- 21) 株式会社リベルタス・コンサルティング (2018) 公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究報告書 (平成29年度文部科学省委託研究)
- 22) 厚生労働省 (2001) 脳血管疾患及び虚血性心疾患等 (負傷に起因するものを除く。) の認定基準について
- 23) 国立大学法人東京大学 (2006) 教員勤務実態調査 (小・中学校) 報告書 (平成18年度文部科学省委託調査)
- 24) 武田文・岡田加奈子・朝倉隆司 (2010) 養護教諭の抑うつとストレス要因の関連 — 都市部公立小・中学校における検討 — 日本健康教育学会誌, 18 (2), 92-102
- 25) 小西清美・名城一枝・仲村美津江・石川幸代・長嶺絵里子 (2015) インシデント・アクシデント発生時における多重課題業務と月経前期や不定愁訴との関連 名桜大学紀要, (20), 29-36
- 26) 鈴木邦治・池田有紀・河口陽子 (1999) 学校経営と養護教諭の職務 (IV) — 養護教諭のキャリアと職務意識 — 福岡教育大学紀要第4分冊教職科編, (48), 23-40
- 27) 井上猛 (2014) 小学校における「同僚性を基盤に置いた現場での教師の育ち (職能成長)」の現状と展望 京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報, 3, 66-77
- 28) 小原快章 (2018) 若手教師と中堅教師の同僚関係に関する実証研究 — 共に学び成長を続けるための助言・援助関係を目指して — 日本高校教育学会年報, 25, 6-15
- 29) 平川俊功 (2014) 養成機関卒業後における養護教諭の資質能力向上に関する学習の状況. 学校保健研究, 55 (6), 520-535
- 30) 丹佳子 (2009) 養護教諭が保健室で行うフィジカルアセスメントの実態と必要性の認識 学校保健研究, 51 (5), 336-346
- 31) 留目宏美 (2015) 学校経営における「養護教

論マネジメント」と校種・校長の影響. 学校保健研究, 57 (1), 29-40

- 32) 武田文・朝倉隆司・岡田加奈子 (2010) 養護教諭における仕事満足感の関連要因 — 職業ストレス・ソーシャルサポート・自尊心に関する検討 — 民族衛生, 76 (6), 253-263
- 33) 川瀬隆千 (2014) 宮崎市における教師バーンアウトの実態 宮崎公立大学人文学部紀要, 21 (1), 35-51
- 34) 赤岡玲子・谷口明子 (2009) 教師の対人ストレスに関する基礎的研究 — ストレス経験に関する教師の語り — 教育実践学研究: 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14, 159-166
- 35) 草海由香里 (2020) 教師のメンタルヘルスと対人関係に関する研究の展望 法政大学大学院紀要, 84, 9-15

The Effect of Multiple Placement of School Nurses on the School Nursing Practices

——Considerations from Literature Reviews——

Tomoaki MEGA

Department of Living Science, Teikyo Junior College

【abstract】

The purpose of this study is to comprehensively review research papers related to the multiple placement of school nurses, examine the impact of multiple placement of school nurses on the school nursing practices, and help clarify and solve future research issues. Experimentation of placing multiple school nurses on duty at once, provided information that was later analyzed thoroughly. The analysis concluded multiple benefits. The advantages observed, were following: “enhancement in skills to consultation and interaction between the students and the school nurses” “enhancement in skills to respond to emergency treatment” “enhancement in skills to school health checkup” “enhancement in skills to provide proper guidance related to one’s health” “respond to students with time and mental leeway” “respond to students quickly” “wide-ranging response to students from a multifaceted and objective perspective” “respond to the needs of students by utilizing individual characteristics” “avoiding the absence at the school health room” “reducing the feeling of restrictions on taking vacations” “reduce the burden by sharing duties” “improvement of work efficiency by simultaneous progress” “improvement of qualification abilities through mutual consultation and cooperation” “increased opportunities for self-improvement” and finally “mental stability of school nurses through consultation”. “biased division of duties” “biased responsibility and unclear whereabouts” “the burden and difficulty of exchanging information” “reduced opportunities for self-improvement of school nurses” and “mental burden due to human relations at workplace” were shown as the main problems, later suggesting various future research topics regarding the multiple placement of school nurses.

【Key words】 school nurses, multiple placement, practices, literature reviews